

「那須平成の森 自然観察会」参加報告

中安 均（富里市）

日 時：2012年6月7日（木）～8日（金）

参加者：20名

担当者：小西博典 山田益弘 前田佳胤

【1日目の見学地】沼原湿原・殺生石

沼原（ぬまっぱら）湿原は30分ほどで木道を一周できてしまう小さな湿原である。乾燥化が進み、湿原から草原、さらに陽樹林へと遷移していく様子が見てとれた。窪地に広がる湿地の周辺の斜面はミズナラやカエデ類が多い落葉広葉樹林で、林床にはチシマザサが多い。観察できた主な動植物は以下の通り。

<花> トウゴクミツバツツジ（咲き残り）、ヤマツツジ（最盛期）、ヒロハツリバナ、ハルリンドウ、オオタチツボスミレ、マイヅルソウ、ユキザサなど。

<多雪地に分布する植物> チシマザサ、ヒロハツリバナ、ハイイヌツゲなど。

<鳥> 繁殖シーズン真っ盛り。ウグイス、クロジ、ホオジロ、キビタキ、アカハラのさえずり。カッコウ、ジュウイチの声も。

<虫> エゾハルゼミの大合唱。あちこちの幹に抜け殻多数。姿を見つけるのは至難。

<両生類> 干上がりそうな水たまりに無数のオタマジャクシ（アズマヒキガエル？）、モリアオガエルの声、クロサンショウウオの卵塊

<ほ乳類のフィールドサイン> ヤマネ？の食痕が残るヒナウチワカエデの若葉が道に散乱、シカに食われて盆栽のような姿になってしまったハイイヌツゲ
(その脇にはシカが嫌うコバイケイソウが青々と勢いよく育っていた)

【2日目の見学地】①那須平成の森

那須御用邸用地の一部が宮内庁から環境庁に移管され、昨年5月から「那須平成の森」として一般に公開されるようになった。敷地内は自由散策ができる「ふれあいの森」のエリアとガイドが同行しないと立ち入りできない「学びの森」のエリアとに分けられている。今回は「学びの森」エリア内のコースで2グループに分かれて研修したが、案内してくれたインタープリターの得意分野によって観察内容には違いがあった。以下の報告は私が参加した「山ちゃん」グループについてのもので、もう1つの「遊ちゃん」グループでは様々な動物の糞の観察に特色があったと聞いた。意外性とストーリー性のある展開で興味深くインタープリートする視点と手法には学ぶべきことが多く、「生き物どうしのつながりの連鎖を大切にしよう」というメッセージがしっかりと伝わってきた。

<ササと雪とのかかわり>

地形等に対応した積雪量の違いによって林床に生育するササの種類が異なる。積雪量がそれほど多くない場所ではミヤコザサが優占する。ミヤコザサの地上部の寿命は1年で、新しい桿が毎春、根際から成長して古い桿と交代する。一方、雪が深く積もる場所ではチシマザサ（通称：根曲り竹）が優占する。桿はとても強靭で、雪の重みにもよく耐え、簡単には折れない。桿の寿命は数年あり、新葉の芽は桿の上部にできる。

[補足] ミヤコザサは主に太平洋側の山地に生育し、分布限界となる積雪量 50cm のラインは「ミヤコザサ線」と呼ばれる。平成の森の平坦地での積雪は 40～50cm とのこと。

<植生の移り変わりを推理する>

この地域は**40～50年**ほど前まで放牧地や薪炭林として利用されていたが、その後は人手が加えられずに放置されてきた。現在では主にミズナラの優占する森となっていいるが、アカマツやダケカンバのような陽樹、ウラジロモミのような陰樹が混生する場所もある。そのような場所で森林の遷移を考えた。この地域の位置と標高からするとブナ林が気候的極相と考えられ、いずれはブナ林へと遷移していくであろうとの解説がなされた。



[補足] この地域は火山噴出物堆積地で土壤の発達が悪いために気候的極相が成立しづらく、途中相の状態のままで留まっているとの解釈もありうる。

<セミの抜け殻調べ>

林内あちこちの木の幹についているセミの脱皮殻を検索表（日本自然保護協会編）で調べ、エゾハルゼミのものであることを突き止めた。触角の第3・4節の長さの比が鍵。

<緑の森の物陰に 見えぬけれどもいるんだよ>

ツキノワグマの糞がトレイルの脇に落ちていた。何を食べているのかを調べるために糞をほぐしてみた。植物の纖維が目立ち、動物由来のものは確認できなかった。

森のあちこちに仕掛けられたセンサーカメラで撮影された動物の写真を見せてもらい、解説を聞いた。クマのほか、シカ、ノウサギ、タヌキ、キツネなどが暮らしている。

「那須平成の森」を分断する道路の上空には「アニマル・パスウェイ」が設置されていた。隔てられた森の間を動物が安全に移動できる吊り橋のようなものである。ヤマネなどが利用することのこと。ビデオカメラが仕掛けられ、モニターされている。

<樹洞をめぐる生物たちのつながり>

立ち枯れた大きな木の根元近くに開いた穴の縁に残された爪痕を巡って、そこで起こった出来事を皆で推理してみた。穴の中に逃げ込んだ小動物をクマが捕えようとした？かつてそこにはニホンミツバチの巣があり、それをクマが襲ったのかもしれない。

枯れ木にはキツツキが最初に穴を掘る（この森にはコゲラ・アカゲラ・オオアカゲラ・アオゲラの4種が暮らしている）。キツツキがつくった樹洞は、他の小型の鳥やほ乳類に再利用されることが多い。運び込まれた巣材や雛の排泄物などの影響で材の腐朽が進み樹洞は広くなり、より大型の鳥獣が利用できるようになる。ただしフクロウやムササビのような大型鳥獣が住みつけるほどの広い樹洞ができる大きな木は少なく、住宅難。

【2日目の見学地】②八幡崎

ツツジ類の群生地として有名な場所で、ベストシーズンには多くの花見客が訪れる。トウゴクミツバツツジやムラサキヤシオ、シロヤシオ、ヤマツツジの花の盛りは過ぎ、サラサドウダンやベニサラサドウダンの花が見頃、レンゲツツジの花は咲き始めたばかりだった。このあたりはかつて馬や牛の放牧場として利用されていた。日当たりが良く、火山噴出物由来の酸性土壤というツツジ類に適した生育環境であることに加え、牛馬がツツジ類を嫌って他の植物を食べた結果、ツツジ群生地が出現することとなった。